

「火の会」の別府講演と校歌（大学歌）の誕生

吉岡義信

はじめに

別府大学歌は周知のとおり草野心平作詞、宅孝二作曲であるが、その誕生の経緯はこれまでほとんど知られていなかったのではないだろうか。「別府大学の三十年」に「大学歌制定の周辺」と題して「火の会」の来別との関係が簡潔に記載されている。3年前、新たにその存在が判明した「別府女専新聞」(以下「新聞」とする)に関連する記事が掲載されており、いろいろ調査していく中で、「大学歌制定の周辺」の内容と食い違う部分も判明してきた。ここで改めて新たな事実を記録として残しておくことにした。また、「新聞」には「火の会」による講演の内容も記録されており、当時の文化人の話として貴重なものであるので、併せてここに紹介しておくことにした。

なお、文中における引用部分の旧漢字および誤字、送り仮名などは可能な限りそのままに、また判読しにくい文字は□で表記した。

「火の会」について

「火の会」について、「大学歌制定の周辺」では草野心平の「火の車」の会との関係性を推測している。しかし草野心平の「別府周辺の思い出」⁽¹⁾には、「火の会という自由な会が戦後間もなく出来上った。私は当時福島の郷里にいたが、これに馳せ参じた。」とあり、「火の会」の設立には直接関わっていなかったようである。さらに調査していくと永淵道彦の「豊島与志雄論」⁽²⁾に設立の経緯が詳しく述べられており、「この会は終戦直後の三木清のショッキングな獄死（昭和20年9月26日）に端を発し、三木の弟子筋にあたる野上彰⁽³⁾の提唱、企画によって、在京の文化人百余名を会員として、昭和二十一年（一九四六年）四月二十日に発会した集まりである。」とある。

また、中島健蔵の「回想の戦後文学 敗戦から六〇年安保まで」⁽⁴⁾には、次のようにある。

「火の会」は、敗戦直後、意識の解放を促進する目的で、詩人の野上彰が提唱して成立したふしぎな集団であった。わたくしが、三木清と親しかった野上彰にはじめて会ったのは、三木が獄死した時の通夜の晩であった（中略）あれもいけない、これもいけないという禁制でがんじがらめにされている日本人の意識を解放しなければならないが、まず自分自身、意識の解放ができるかどうか。意識を束縛する点では、蘇生した「革新」も似たようなものであった。ブルジョア意識からの解放の次にひかえているのが、教条主義的束縛だったら、どうにもならないではないか。そういう悩みの最中、一概に空想

的ともいいかねる運動がはじまった。その一つが「火の会」であった。野上彰の提唱に、わたくしは躊躇なく応じた。そこには、意識の解放のほかに「共通の広場」の成立という夢があった。（中略）「日本作家組合」についても、「火の会」についても、戦後の新しい集団に参加しながら、わたくしはたえず、「共通の広場」の成立を夢みていた。「火の会」の発会式は、一九四六年（昭和二十一年）四月二十日、銀座一丁目の実業之日本社社屋の焼けビルの二階を借りて開かれた。

このように、「火の会」は野上彰による提唱と中島健蔵の賛同によって成立したことになる。参考までにこの本にも紹介されている4月22日付「東京新聞」夕刊2面に掲載されている設立に関する特集記事の一部を紹介しておく。



東京新聞「火の会」設立の記事

前衛藝術火の會生誕

虚構の上に立つた權威は地におちた、藝術もはじめて自由な沃野へ解放されて人間のものとなつた、花園は拓かれた、いなわれらの手によつて拓かれねばならぬ、そしてわれらは自由な世界の公民とならねばならぬ、國土の荒廃と飢餓の上に、世界の公民のさいわひのために、よき新しき藝術を創らう、この國の藝術家たちの間にいまその藝術の火が點ぜられた、それは日本のアヴァン・ギャルド（前衛藝術）である、すなはち名づけて「火の會」といふ、参ずる者豊島與志雄、中島健蔵、青野季吉、荒正人、平野謙、小田切秀雄、古在由重、松本慎一、野口彌太郎、荻須高德、脇田和、猪熊弦一郎、三岸節子、長澤節、村山知義、千田是也、東畑精一、近藤忠義、貝谷八百子、三橋蓮子、井上勇、野上彰、大森直道、海老原光義、宅孝二等々文壇、論壇、畫壇、樂壇、チャーナリズムのアヴァンギャルティストを網羅し、二十日午後四時銀座實業之日本社二階で發會式を挙げた、會は先づ葬送行進曲のうちに過去を葬り、ついで中島健蔵氏の宣言朗讀、各人各説、故三木清、武田麟太郎の名誉會員推戴の緊急動議を可決、野上彰作詞、宅孝二作曲の「アヴァン・ギャルドの歌」を斉唱、型破りの發會式を閉ぢた、火の會は眞に新しい藝術の先驅として季刊雜誌「火」の發行の他音樂會、バレエ、展覽會の開催等多分野に、積極的藝術運動を展開することになつた、（以下略）

また中島健蔵がいろいろな記録の中からひろい集めたものとして、石川淳、巖谷大四、桂ユキ子、草野心平、佐藤敬、佐藤美子、高木東六、高見順、西田義郎、速水律子（後の野上彰夫人）、埴谷雄高、藤田圭雄らもいたとしている。（5）

豊島與志雄は雑誌『スタート=The Start』(6)の対談で、「火の会」についてヨーロッパで第一次大戦の頃に起こったアヴァン・ギャルド運動とつながるものではなく、もっと根本的な問題、即ち人間としての再出発を意味する一つのムーブメントに過ぎないとし、ヨーロッパの運動からは、ダダイズムとかフォビズムとかシュールレアリズムとか芸術上の主義・主張が出来たが、そういう期待もないわけではないが、われわれとしては単に機運を醸成すればよく、それだけで指名を果たしたとするわけで、そういう傾向があらわれれば会は無くしてよい、と言っている。

ちなみに、「火の会」は東京での 4 回の大会と京都(昭和21年)、九州(昭和22年)、北海道(昭和26年)の 3 回の地方遠征を最後に、季刊誌「火」の発行をみることなく自然消滅的に散会となった。

「火の会」メンバーによる別府講演

中島健蔵によれば、佐藤敬、佐藤美子の口ききで九州遠征が行われ、最初は昭和22年11月8日、9日九州大学医学部講堂で講演会が行われている。ここでは火野葦平と秋山六郎兵衛が参加、また九州大学の伊藤徳之助教授が阿蘇まで同行したとある。この一行が11月12日、別府に立ち寄り講演会を行っている。同日の『大分合同新聞』には以下の記事が、大分駅頭での一行の写真とともに掲載されている。



点火作用の役目 火の会、一行大分入りの言葉

大分合同新聞「火の会」大分入りの記事

十二日午前十時別府市公会堂における特別文化大講座に出席する「火の会」同人十一名は十一日午後二時十五分大分駅着、直ちに別府公会堂裏清香園に投宿した、一行を代表して作家豊島與志雄氏は大分入りの感想を駅頭でつぎのように語った、自分は二十年前に別府にきたことがあるが、佐藤敬君夫妻を除いて一行のほとんどは大分ははじめてですし、高見、中島両君は九州入りが最初です、地方文化の行き方について、私たちは何も指導じみたことをするのではない、地方は地方として自発的に盛り上がるのが本場で、そうした空気を作るうに「火の会」の行動が一つの点火作用となれば幸いです、地方も中央もない広い深い文化の建設を指向しなければならないと思います

講座の内容はつぎのとおり決定した「開会の辞」廣中縣社会教育課長「あいざつ」細田縣知事「火の会あいざつ」佐藤敬「ユネスコについて」中島健蔵、「パリの画家たち」

荻須高德「詩の言葉について」草野心平「ぼくはなぜ小説をかくか」高見順「ぼくはなぜ画をかくか」佐藤敬「文学の世界」豊島與志雄「管樂放談」宅孝二「ピアノ演奏とソプラノ独唱」宅孝二、最相制子、佐藤美子

なお一行は十二日夜清香園に開く本社主催の文化座談会にのぞんで郷土芸術家二十数名と語り合う

またこの時の講演の様子が次のように草野心平の「別府周辺の思い出」、「九州の旅」、「城島原今昔」（「草野心平全集」）に記されている。

福岡、太宰府、熊本、阿蘇とまわって最後がこの別府だった。一行は豊島與志雄、中島健蔵、佐藤敬、荻須高德、佐藤美子、高見順、海老原光義、宅孝二に私にぎやかだった。（中略）中島が私にいった。「お前は、なかなか演出をやるな」という意味だが、咄嗟には分らなかったが、説明をきくと昼間の講演のとき、壇に登った私は二階正面の時計をしばらく眺めていてから、なんかしゃべり出したのだそうである。そのタイミングが、彼には演出と思えたらしい。とんでもない。実のところ、私は、壇上からその時計が目にはいると、しゃべろうとしていたことがストップしてドギマギしちゃったのであった。（「別府周辺の思い出」）

講演をしたのは福岡と別府だけだったが、廻ったのは太宰府、熊本、阿蘇、城島原、竹田、岡城趾など、講師は豊島與志雄、中島健蔵、佐藤敬、佐藤美子、荻須高德、宅孝二、高見順、海老原光義、私などの面々だった。講演というのは自他共によっほどの名講演でない限り何をしゃべったか忘れてしまうもので、私自身は何をしゃべったか皆目記憶にない。（「九州の旅」）

阿蘇から別府へ出て講演した。会場は何処であったか忘れたが、変なことを一つ憶えている。話し終わって控え室にもどると、中島健蔵がいきなり私に言った。「心平、お前さんは演出がうまいな」何のことか自分には分らなかったが、彼の説によると、壇上にあがってから一分か二分黙っていた。あれは正に演出だというのである。本当のところは演出どころか、壇にたったら真正面の椅子席のところの時計が眼についた。途端に私はしゃべり出そうと思ってたことをすっかり忘れてしまった。そこで何をキッカケにしようかと迷ってしまい、一寸した沈黙がつづいたのだった。（「城島原今昔」）

草野心平が「講演というのは自他共によっほどの名講演でない限り何をしゃべったか忘れてしまうもので、私自身は何をしゃべったか皆目記憶にない。」と言っている講演の要旨が、「新聞」と「大

分合同新聞』に掲載されており、この点からも貴重な資料と言える。以下、比較の意味で両者の内容を載せてみることにする。

別府での講演会の模様

『新聞』(11月23日第3号)には、講演の様子が次のように掲載されている。なお、「学園メモ」には学校は休講し全員で聴講したとある。

火の會を迎え文化大講演會

新時代の感覺をもる、文化運動ののろしであり、又縣下の人々に新鮮な感覺を吹き込まおとする「火の會」は、文化を切望して居る者にとつて、實に大きな期待であつた。その心に應えるが如く十一月十二日別府公会堂でその幕は開かれ、文化人をして十分に悦ばしめたのであつた。開會一時間前より、文化を慕う学生や、各地から馳せ参じた人々で、観客席は埋まれ、何となく明るい雰囲気をかもし出して居た。

先づ細田知事のあいさつ、續いて佐藤敬先生の「火の會」を代表してのあいさつがある。「火の會は文化の□方をはつきりと自覺し、新しい方□を打開するために、人間的であり世界的でなくてはならぬ」と簡単に説明があり愈々待望の講演が繰り廣げられたのであつた。

ユネスコについて 中島健蔵⁽⁷⁾

戦争のため、日本は全く國際的なつながりを失つた。しかし、ユネスコによつて、どこにかそのつながりが保てるわけである。ユネスコとは國際聯合教育文化科学である。ユネスコの歴史としては、此の前の世界戦争後、國際聯盟として既にあつたが、それは失敗であつた。今次の戦争中、ジユル・ロマンは、平和會議の開催を提唱し、理想社会の建設を目指し、ユネスコ運動を起こしたのであつた。それは多數決により、平和を維持せんとするものである。ユネスコは、今世界へ送る放送をしようとする動きがあり、自由交通の企画もある。これによつて、世界の文盲を無くしたいと考えて居る。そして日本では、ユネスコにより世界的に考える、いと口を作ろうと計画しているのである。



別府女専新聞の「火の會」講演掲載記

パリの畫家たち 荻須高德⁽⁸⁾

自分がパリに居た時、マチスの畫室を訪ねた。私はその畫室から又彼の言葉から実に大きなものを教えられたのであった。老人の顔一つ書くのでも、実に多くの労苦がなされている。最初は丁寧に書かれた老人の顔が、だんだんと省略され、單純化されて、二十數枚目によく出来上つている。彼は目をつむつてもてその絵が画ける程度に練習をつみ、更に眼球の心のカメラを通つて、始めて畫は出来上るのだと云つて居た。この事は我々としてもよく把握しておきたいものである。

詩の言葉について 草野心平⁽⁹⁾

詩は言葉が大切である。今まで使つて居る言葉をそのまま、並べたのではいけない。その場合に即した、最初にして最後の言葉、このたつた一つの言葉がよい詩を生み出すのである。リアリテイのある、新しい言葉を用いるとよい詩が出来るのである。人は皆、自分の言葉というものを持つて居なければならぬ。若し持つて居なかつたならば、新たに創造すべきである。

僕はなぜ小説を書くか 高見順⁽¹⁰⁾

米國の小説家、ヘンリー・ジェームスは何故に二十世紀の小説家として再評価されているのか。その二十世紀の小説とはどお云ふものか。それはつまり、十九世紀的リアリズムから抜出さねばならぬ、二十世紀の小説は、文學的事実で独立したものを構成する。つまり心のリアリズムを現わす事によって、世界文學が成立するのである。私はこの見地から長い伝統と十九世紀的なものより半歩でも踏み出したいと念願して小説を書いている。

僕はなぜ畫をかくか 佐藤敬⁽¹¹⁾

画と云うものは、自然の模写であつてはならぬ。花を緻密にかいただけでは絵にならぬ囚えられた所の意識的なものを、画面に現わした始めて絵となるのである。自然が画家の心の中に通じて、その感じ方、考え方で、新しい宇宙を構成するものである。ゼネラル・シヨンは云つて居る、又セザンヌは、自然を分析的に描くと云い、物の美は、立体、平面線の組立にあると云つて居る。眼で現実を見それを独自の世界に採り入れ、発散させたものが藝術である。私は画が好きで画くのだが、ただ好きと云う気持ちだけでは、満足出来ずピカソやセザンヌの開拓しない新しい独自の世界を画き、それを通じて、心ある人間性、より新しいものを肉体化した人類を作りたいと思つて絵を書くのである。

文学の世界 豊島與志雄⁽¹²⁾

文学の世界は、自己を主張する個性尊重の自由な世界であり、又現実とは別個に組立てられている他共に自由であるから、それぞれ個性によって異り、その点を意識する。その異った点を知らせる為に、作家は作品を創る。それを作品の構成にしたり、作品の中に入れて発表するのである。

続いて草野先生がその自作詩“牡丹園”及び“誕生祭”の朗読をされた。即ち彼の最初にして最後の言葉を遺憾なく発揮した美しい詩、人々はその新しい形式に人々はみされたのであった。

音楽放談 宅孝二⁽¹³⁾

日本のピアニストは、すぐコンツェルトをしたがり、歌手はオペラをしたがる。それは悪い癖だ。そして人々はベートベンや、其の他天才音楽家の作曲したものにはすぐ感激するが、彼等にも悪い作品が沢山ある。皆さんは、これに惑わされる事なく、フレッシュな感覚でもって、音楽を聞く様にして戴きたい。

続いて宅先生と最相制子⁽¹⁴⁾さんのピアノの二重奏がなされた。新しい試みとしての“おとぎ話”の演奏後、佐藤美子⁽¹⁵⁾先生の独唱であつたが、“湯の町ブルース”等は、流行歌の趣とはおよそ異つた藝術的香気の高いもので、人々の心に流行歌に対する新しい認識の火を点じた。

次に「大分合同新聞」(同月13日)の掲載記事を見てみることにする。

文化の香を慕う 縣下各地から多数の聴講者

自立の自由を火と掲げて文化の道を開拓するアヴァン・ギャルド「火の会」一行を迎えて憲法普及会縣支部が催す「特別大文化講座」は縣と縣教職員組合文化部ならびに本社の後援で十二日午前十時十五分別府公会堂に豪華な幕を開けた、大分、別府両市はじめ遠く中津、日田、長州、国東、佐伯地方など縣下各地から集つた聴講者は一時間前から開会を待ちわび多数の若い婦人の姿が会場を明るく彩る、細田憲法普及会縣支部長の開講のあいさつ、佐藤敬氏の「火の会」一行を代表してあいさつがあり、終戦後の縣の文化運動に一エボツクを画する本講座は妻城縣社会教育課囑託の司会で進められた

ユネスコについて 中島健蔵

ユネスコとは國際連合教育科学文化機関のことで終戦後國際的な神経を失つた日本でもこれを通してようやく世界的なつながりをもつことができる、第一次大戦後生れた國

際連盟は失敗の歴史であつたが、今次大戦中「ヨーロツバの七つのなぞ」を書いたジユル・ロマンは平和会議の開催を提唱したりして理想社会の建設をあきらめずユネスコ運動を起したのだが、これは國を單位とする國際連盟の思想から脱して「各國の自主性」を破らず多数決による制裁力で平和を維持するものである、世界中の國は過去のような独立はできなくなり、世界國家のような方向に進むだろう、ユネスコ運動に最も関心と協力をよせているのはアメリカである、ソ連は國際連合にはいつてはいるがユネスコには参加していない、日本には京都、仙台にユネスコ協力委員会ができ福岡にも設置の氣運がある、ユネスコ精神は藝術の分野にも協力、單純、統一、連絡の形で取入れられつつある

パリの畫家達 荻須高德

ある初夏、モンバルナスから裏にはいつたマチスの畫室を私は猪瀬絏一郎君とともに訪れた、壁に多くのデッサンと未完成のような油絵がかけてあつた、さらつと画いた老人の肖像のデッサンがあつたが、これは知人の本の表紙に書いたといつていた、そのほかに実にこくめいに画いたデッサンが二十数枚もあつたが、それを省略し單純化して行つた結果が、その老人のデッサンができたのだといつた、心のカメラを通したものが絵であると彼はいつたが目をつむつてもかけるまでに彼は何枚も何枚も画いているのだ、これから外國の新しい絵がどんどん日本にもくるだろうが、どんなに簡單なものでも、それを製作するにはこのような作家の努力がひそんでいることを記憶していただきたい

詩の言葉について 草野心平

芭蕉の有名な俳句に「古池や蛙飛び込む水の音」があるが、その以前には「上五」の「古池や」「山吹や」としていた、「山吹や」では色があつて、芭蕉のねらつた靜寂が出ていないので改作したのである、このように言葉を追及しなければならぬ、最初にして最後の言葉、すなわちたつた一つの言葉を詩人は見つけ出そうとする苦勞がある、これが詩人の商売秘密である、二日前に登つた阿蘇山の詩を作りたいと思うが、あの壯絶な大自然を詩に作ろうとすればやはり二、三年間はかかると思う、詩の言葉は形容詞的のものでなくて立体的、肉体的なものでなくてはならぬ、詩的な表現として「青い月」という言葉があるが、むしろただ「月」という方が詩的である、宮沢賢治の詩に「びじょ、びじょ、みぞれが沈む」というのがある、この場合の「沈む」は普通の使われる「ふる」よりも陰性なみぞれの性質をよく表現している、詩になる場合はどんな勝手なことを書いても、どんな考えを表現しても適格な言葉を使い、リアリテイのある言葉を見出せば詩はやさしい、幼稚園の子供が「日本はりゆうの形に似ている」という、これは詩である、しかしこれを私が真似することは詩ではない、世界の沢山の詩人がやつていることをやつてはいけない、大分縣にいる人が詩を作る場合でも誰も作つていない別の新しいものを作

り出さねばならぬ

ぼくはなぜ小説を書くか 高見順

いま米國で二十世紀文学の先驅者として再評価されているヘンリー・ジェームスの最近の作に二十歳の教養と感受性の高い女子家庭教師を主人公とし、死人の影のこびりついた古い邸宅で表面は純眞を装う小さい兄妹の教育を委託され、死んだ従者、生死不明の前任の女子家庭教師などの不吉な心霊におびえながら、この家庭教師をめぐる秘密の真相を探ろうとする経過を追って神秘、恐怖、興味、愛情などの深刻な心理分析を行っている「ターン、オブ、スクリーン」という小説がある、新しい小説とは十九世紀的なリアリズムから隔れ、抜け出らねばならぬと思う、私は生きるがために小説を書く、文学の流れから半歩でも前進するために人生を費したいと願っている、現実から作家が握つたものを客観して文学的現実を作ることは過去のものとなつた、新しい文学は現実と文学的現実を分離し独立した文学的世界(心のリアリズム)を創造することに方向を持つだろう、その方向に私は前進の一步を踏み出したいのである

ぼくはなぜ畫を描くか 佐藤敬

自然、現実のままでは画にならぬ、これを画家の心を通し、いいかえれば佐藤の心の中を通り私の考えたこと、感じ方で新しい宇宙を作り出すことが画を描くことである、実際の花と画の花は違う、古い言葉に「画そらごと」というが私は画は画そらごとでよいと思う、菊の花そつくりの画をかこうとするなら切紙でもはりつけた方がいい、自然そのままがいいなら美しい別府湾を小さいキャンパスに画く必要はない、心の中で色々感じたことを小さい宇宙に作り上げることが画である、これが絵画の秘密であり魅力である、十九世紀までは自然を探求して自然の再現に努力しているがこれらうそである、第一次世界戦後虚無思想が現われ、ダダイズムが起り、日本ではほんものとならず上つ面の眞似で消えた、しかしフランスでは詩人アルゴン画家ピカソの偉大な藝術がこの中から育つた、第二次世界戦後シュウリアリズムが起つている、この運動が最も注目されるものである、私は画を描く、なぜ描くか、なるほど大雅、竹田、光琳、セザンヌ、ピカソ、マチスなどの優れた画家はおるが、これらの先輩の住んだことのない空間に現在私は住んでいる、すなわち生きている、この現実を心に入れて先人のできなかつた何かを組立てようとするのが私の心である

文学の世界 豊島與志雄

文学の世界は自分も他人も存在を主張する個性尊重の自由な世界で現実とは別個に組立てた文学的現実がより明かに現実の本質をつき、個性をつかむという一種の虚構の世

界である、誰も知らぬ秘密を知ったとき誰かにこれを知らせたいというのが人間の気持であるが作家は発表したくてたまらぬ、何かを作品の中に織りこんで作中の人物に語らせまたは作品の構想として展開させるのである

ついで草野心平氏が自作詩「牡丹園」、「誕生祭」を解説朗読ののち

音楽放談 宅孝二

モダン形のバツハにしても今日からみれば裁判官みたいな様子をしている、彼は教会の音楽も書いたがダンスミュージックも沢山発表している、ベートーヴェンはミニエツトのような他愛ないようなものもつくっている、第五シンフォニーを聴いていると終楽章に子供の唱歌をうたつておのが出てくる、これを聴いて音楽ファンは涙を流して聴いている、音楽家の傳記で感心するのはモーツァルトとシューベルトでモーツァルトは若い女性にもなかつたが、シューベルトがもし日本に今住んでいたなら上野駅の地下鉄などでこじきみたいになつておるのではないかと思う、彼は一生居候生活で朝から晩まで音楽を考えていた、当時における音楽の実力はどうかといえば誰も認めてくれなかつた、当時近所に住んでいたベートーヴェンに逢いたいと思ひながら氣が弱くて行けなかつた、彼の作品をみたベートーヴェンは「自分のあとをつぐものはシューベルト」といつたといわれている、こうした傳記を読むと私は感激してしまう、ショパンもおしやれで有名なプレリウドをつくつてバリの出版局に賣りその金で洋服を作つた、これらの音楽のほんとうによい所を当時の人は看破できなかつた、日本ではピアニストがすぐコンツェルトをやりたがり歌手はオペラをやりたがる、歴史的演奏をやりたがつても音楽図書館も音楽史もないからだめだ、皆さんは音楽をむつかしく考えずフレッツシユな感覺を大切に自分のアンテナを大事にしてもらいたい

各講師の講義が終つてプログラムは最後の音楽演奏に移り、宅孝二、最相制子両氏のピアノ二重奏「ラブソデイ・イン・ブルー」「おとぎばなし」の軽快なタツチとハーモニ、佐藤美子氏のソプラノ独唱「ヘブライの祈り」「モンマルトルの歌」「湯の町ブルース」など七曲の美しい旋律が、人々の鑑賞欲を満たし午後四時半すぎ記録的な本講座は知識人の胸に明るい火を投じて終つた

藝術、文學、音楽を語る 文化座談会

「火の会」一行を迎えて本社主催の文化座談会は文化講座に引きつづき十二日午後六時半、別府市清香園で開き、縣下各地の文化関係代表者三十余名が出席、渡辺取材部長の司会で講師とひさを交え藝術、文學、音楽、文化などの諸問題について話し合い九時

散会した

本校に來学した際の様子

「大分合同新聞」(同月14日)に「火の會一行縣下での動靜」として「別府市清和園⁽¹⁶⁾滞在中の「火の會」一行佐藤敬、高見順両氏は十三日午前八時半別府高女で、中島健藏、荻須高德、草野心平の三氏は別府女専で講演ののち一行は午前中城島原や地獄コースをドライブし午後は戸次町帆足隆一氏方で「竹田」の名作を鑑賞した、なお豊島與志雄、宅孝二両氏、最相制子さんは同日別府発、高見、草野両氏は十四日海路帰京、中島、荻須両氏は当分佐藤敬氏方に滞在の予定」とある。

実際は中島、豊島、高見の三氏が別府高女で講演しており、その内容は『回想の戦後文学』に記載されている。また『音楽とわたくし』にも講演会および戸次でのことが書かれているが、ここでは省略する。

上記のように講演会の翌日、草野心平と荻須高德の両氏が本校を訪れ講演しており、この模様が「新聞」の「火の會」講演の記事に続いて掲載されている。

兩氏を本校に迎える

翌十三日、草野、荻須の兩先生を学校にお迎えした事は、私達にとって大きな喜びであった。先ず荻須先生が、巴里の女性について彼女等が如何に感覺的調和を尊んで居るかを、先生独特のゼエスチュアととつ弁でお話になる。巴里の女性は、非常に調和を重んじる。所持品は勿論、帽子からハイヒールのかゝとの反り具合にまで調和の美を見出して居る。それは驚くばかりである。そんな風であるからどんな場末の洋服屋でも、先づ線の強さを云い、そして服の型を評する。巴里に居た時、フランスの知人と共に、デイナーを共にしその席上でこう云はれた、日本の女性は、従順でよく働くが、独立心がない。例えば結婚しても夫の死別後についての考えは少しも持たないから忍ち生活に困ってしまう。これ等は、彼女等に独立心がなく、依頼心が強いためだ。それに較べるとフランスの女性は、上流社会の人でも自分の技能を一つはもって、まさかの時は十分役立たせる事が出来るのである、と。私はこれを聞いて、大変考えさせられたのだった。皆さんも十分考えていい問題だと思ふ。

つづいてお話の草野先生は、如何にも詩人らしいタイプの方である。先生はお忙しい時間を私達の為めにお話下さるばかりでなく素晴らしい校歌をも創って下ったのであった。私はここに来る前、詩のお話をしようと思って居たが、この学校に着いて皆さんの顔を見、そして窓外の景色を眺めて、急に私の卒業した廣東大学が恋しくなり、頻りに思ひ出されるので、思ひ出すままに、その事をお話する。とおっしゃって、その大学の設備のよさ、学校の内容の素晴らしかった事を、み力溢れる口調でお話になる。

「学校では皆、それぞれの夢を持ち、行動して居たから楽しかった。だから皆さんも、どんな小さな夢でも一つは必ず持つべきである。」とお話は進む。講演後、すぐにお帰りにになると云ふ慌しい先生を捕えて、学校の感想を伺ふ。

この様な、風景のよい、清澄な空気の下で勉強される皆さんが羨しい。皆さんは皆、文化的で、眼は理知に輝いている。忙しい私達だが、もお一遍来て是非お話をしたい。十四日は更に中島先生と高見先生とが御來校下さる予定だったが、音楽堂設置の問題で竹田に行かねばならぬとて、帰る間際まで非常に残念がっていた。尚佐藤敬先生も美子先生も、近日お話に御來校下さると云ふ嬉しいお約束である。

火の会の先生方が、学校に対して非常な好印象を持たれた事を感謝すると共に、ますます文化向上への路を辿る事をお約束したのであった。

校歌の募集

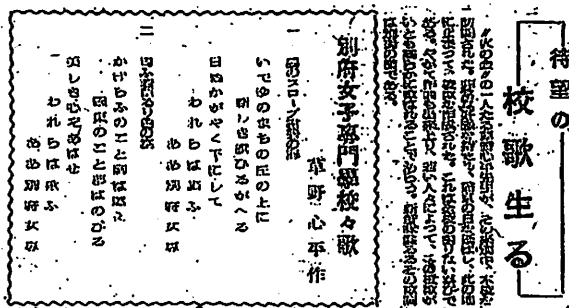
【新聞】（昭和22年8月22日第2号）に、「校歌募集」始まる」との小さい見出しと共に以下の募集記事が掲載されている。

創立以來一箇年余、女專昇格の念願も叶い、我が別府女專の前途は明るい光明に輝いている。そして今や我が女專にも校歌をの要望は生徒間の熱心な夢である。我らの生命を、力を、感激を高らかに讃う歌のないさびしさは耐へがたい“出でよ傑作”学生諸子の心からなる応募を乞う

校歌の誕生

【新聞】第3号に、「待望の校歌生る」と題して以下のように掲載されている。

“火の会”の一人たる草野心平先生が、その來別中、本校を訪問された。非常な好感を持たれ、帰京の日を延ばし、此の地に止まって、校歌を作成された。これは全校の限らない喜びである。やがて作曲も出来上り、若い人々によって、この校歌がいとも高らかに歌はれることであらう。新鮮味溢るその歌詞は別掲の様である。



この歌詞を見て気付くと思うが、現在の別府大学歌の歌詞と違う所は、当然であるが最後の「ああ別府大学」が「ああ別府女専」となっている点である。もう一箇所、2番の歌詞の「美しき心ぞあわせ」の所が、現在では「美しき心ぞつどい」となっている点である。

草野心平が本校を訪れた際の様子と校歌を作詞するに至った経緯が『草野心平全集』に掲載されている。

郊外に女子専門学校があってそこへも講演に行ったが、帰るとき車に乗ろうとしたら女の子たちがワンサ集まって校歌を作ってくれとせがまれた。そんな明るさにも、その頃は滅多にぶつかることはなかった。(結果は私が作詞し、宅孝二が作曲した。)ところでその夜宴の翌日は一応解散ということになったが、別府を去ったのは豊島さんや宅君たちで、大部分が居残った。解散の前、城島原へは皆んなで出掛けたが、その高原がべらぼうによかったので、荻須高德と私はまた出かけていった。(中略)一泊した翌日の昼、別府から佐藤敬が案内役で小磯良平と吉岡堅二が登ってきた。(中略)私たちはその日のうちに四人揃って別府に降りたが、直ぐには東京へ引きあげようとはせず別府市にある佐藤敬の家に厄介になった。(中略)佐藤家にねばったのは二、三日だったろうか、十数年も前のことではつきり憶えていない (「別府周辺の思い出」)

翌日は別府女子高専(?)で高見順と私がしゃべったが、済んでクルマで帰ろうとすると、女の生徒たちはクルマのまわりに集まって校歌をつくってくれとせがんで、なかなかクルマを走らせない。宅孝二という芸大の先生もいることだし、校歌の歌詞をつくることにした。私たちはそれからみんな地獄谷を見て城島原にのぼっていった。(中略)そしてその翌日荻須君と私はまた城島原に登りクラブハウスに泊まった。そこで私は校歌の文句を作った。するとその翌日佐藤敬と小磯良平があがってきた。

(「城島原今昔」)

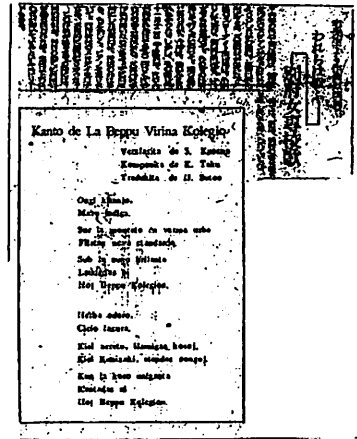
草野心平は、13日に本校で講演の後城島原に行き、翌日も再び行ってクラブハウスに一泊、そこで校歌を作詞したとある。さらに別府の佐藤敬宅で2、3泊したとあり、日程的に見ると17日か18日まで別府に居たことになる。『新聞』第3号の「学園メモ」の欄に「11月18日 校歌生まる 草野心平作詩 宅孝二作曲」とあり、おそらく18日に歌詞が届けられたのであろう。

『別府大学の三十年』によると、「草野心平氏は当時キャンパス内に起居していた首藤基教授の部屋で三、四泊することになった。「大学歌を作りたい」と言う首藤教授の話を、草野氏は快諾し即刻に作詩されたのが、この大学歌であったと言う。」とあるが、明らかに草野心平の記述とは違っている。さらに、「作曲者の宅孝二氏は、この折りには、来別されてはいなかったが、草野氏が、帰京後に、宅氏に作曲を依頼されたものらしく、楽譜は、草野氏より後送されて来た。」とある。しかし、これも前述のとおり宅孝二は来別しており講演も行っている。また、後述のように楽譜も宅孝二から届いたとあることから、記述に違いが見られる。

翌、昭和23年11月12日、宅孝二より作曲が届けられている。その時の様子が『新聞』第13号に掲

載されている。

宅先生より作曲原稿届く われらは歌う一別府女専校歌
 昨年の火の会の来縣は□□□まづそのアヴァンガルドの
 火を燃えうつしたかの様に、草野心平先生による、女専校
 歌が生まれた。扇のスロープ、ト学生達は、小躍りして
 喜び、先生の来校をいつまでも手を振って、みのりの丘を
 降りて行く車に向って、願つたのであったが、今年は遂に
 みえられなかった。しかし、その変りに十一月十二日（丁
 度去年、火の会が開かれた日である）同じく火の会の宅孝
 二先生から、女専校歌の作曲が届いたのである、文化祭を
 前にした生徒達は、授業のおはるも、もどかしく、ピアノ
 を取りまいて、新作校歌のメロデイを口ずさみ、本格的に練習にうつった。この作曲が
 成るまでの蔭には、寮監先生が、毎日の如くに嘆願の手紙を送られた等、生徒以上の熱
 心さが働いているといふエピソードもある。寮では、早速、感謝の寄せ書きをなしたと
 も伝えられている。



この横文字はエスペラント語であり、「H. Sutoo」は首藤基教授のことである。先生は物理学を
 教えていたが、この当時エスペラント語も指導していたようで、『新聞』にはエスペラント会の発
 会に合わせ、「わが女専校歌を作曲に合せてエスペラント訳にし、一般公開することとし、本紙に
 発表した」とある。また、先生は当時、学生課長もされており寮に住んでいたとあることから、「寮
 監先生」とあるのは首藤先生のことかもしれない。であるならば『別府大学の三十年』にあるよう
 に、草野心平に依頼したという記述とは違うが、何らかの形で関わっていた可能性が十分に感じら
 れる。

おわりに

以上のように限られた資料ではあるが、校歌（大学歌）は、「火の会」による別府講演が無けれ
 ば誕生しなかったことがわかる。また、誕生までの経緯についても学生が草野心平の乗った車に駆
 け寄ってせがんだこと、作曲には寮監先生が嘆願の手紙を出し続けたことなど、これまで知られて
 いたものとは違っていたことが窺える。この誕生の経緯を知ることで認識を新たに、機会あるごと
 に歌われんことを願ってやまない。また、新しい資料の存在をご存知の方がいれば、是非ご教示願
 いたいと思っている。

最後に「火の会」の設立と別府での講演内容の掲載について、快く許諾をいただいた「東京新聞」
 および「大分合同新聞」の関係者に改めてお礼を申し上げたい。

注

- (1) 『草野心平全集第 8 巻』草野心平著 筑摩書房 1982.1
- (2) 『豊島与志雄論—火の会、生い立ち、童話』永淵道彦著 双文社出版 1997
- (3) 野上彰 明治42年(1908) - 昭和42年(1967) 編集者・詩人、京都大学法学部中退、雑誌の編集長をつとめるなかで、作家たちと交わるうちに創作に志した。幅広い交友とすばやい企画力で昭和21年芸術前衛運動の集まり火の会を結成、24年には日本語訳詩委員会、41年には「正しい日本語と美しい歌」をスローガンに波の会を組織した。
- (4) 『回想の戦後文学 敗戦から六〇年安保まで』中島健蔵著 平凡社 1979
- (5) 同上『回想の戦後文学』の他に『音楽とわたくし』(中島健蔵著 辨談社 1974)にも「火の会」について別の視点で書かれており、同じ参加者名が記されている。また雑誌『心』(心編集委員会 31(9)1978.9)にも「昭和の作家群像(8) — 「火の会」の遠征 —」と題した記事があり、「火の会」設立の経緯や九州遠征の様子が詳しく書かれている。これには織田作之助が「火の会」に対抗して京都で「水の会」を作ったともある。
- (6) 『スタート=The Start』スタート社発行 第1巻第4号 1946.11.1 「「火」の座談:豊島與志雄氏に聞く」
- (7) 中島健蔵 明治36年(1903) - 昭和54年(1979) 評論家、フランス文学者。昭和3年東京帝国大学文学部仏文科卒、副手として研究室に残り37年に退任するまで28年間万年講師を務めた。多面的な文化活動で知られ、24年に日本著作権協議会を創立し著作権問題の解決をめざした。31年に日本中国文化交流協会を設立、十数回訪中し文化交流などに尽力、国交回復の気運を高めた。
- (8) 荻須高德 明治34年(1901) - 昭和61年(1986) 洋画家。大正15年東京美術学校西洋画科卒業。渡仏。佐伯祐三のグループに入る、ユトリロ的な風景を描く。1940年帰国し新制作協会会員となる。1948年パリに戻る。
- (9) 草野心平 明治36年(1903) - 昭和63年(1988) 詩人。宮沢賢治、高村光太郎、萩原朔太郎等と親交があった。慶応普通部中退後、昭和10年中国広州に渡り嶺南大学に学ぶ、14年4月詩誌「鋼繩」を創刊、排英排日運動のため7月に帰国、生活のため焼き烏屋を開店したり職を転々とする。15年中国南京に赴き、21年帰国。蛙の詩の集大成「定本蛙」は第1回読売文学賞を受賞。
- (10) 高見順 明治40年(1907) - 昭和40年(1965) 小説家、昭和5年東京帝大英文科卒業。プロレタリア作家同盟の一員として活躍、昭和10年「故旧忘れ得べき」で作家として認められ、以後数多くの作品を発表。晩年は日本近代文学館の創立に参加、初代理事長として活躍。「高見順日記」は文学史のみならず、昭和史の資料としても貴重。
- (11) 佐藤敬 明治39年(1906) - 昭和53年(1978) 洋画家。大分出身。昭和6年東京美術学校西洋画科卒業。昭和5 - 9年滞仏。昭和11年新制作派協会の結成に参加。同27年以降パリに住み、マティス、ピカソの影響から独自のモダニズムの画境をつくった。

中島健蔵によると九州講演の折、「1920年代に佐藤敬が左翼の前衛劇場の美術部にいて、まもなく離れたころの事情を、わたくしはその時はじめて聞いた」とあり、また「時々首をかしげて、じっと風景や

人物を見つめながら、一さいスケッチをしなかった。目にうつるものが、彼の心の中を素通りしているわけではないらしかった。四角いフェルトの芯の先を斜めに切って、マジックインクを軸に含ませたペンは、今では珍しくなくなったが、そのころは、まだわたくしも見たことがなく、夜、遊び半分にみなで色紙に寄せ書きなどをする時、佐藤敬はそれを使ってみせて、うらやましがらせた。」ともある。

- (12) 豊島興志雄 明治23年（1890）－昭和30年（1955） 小説家・翻訳家、東京帝国大学仏文科卒業、大正3年芥川龍之介らと第3次「新思潮」をおこす、昭和7年明治大学教授に就任。小説、戯曲、評論、翻訳、児童文学と幅広く活躍した。知性と叙情の調和した作風で、特に心理分析にすぐれる。創立者・佐藤義詮先生は、学生の頃、豊島興志雄にヴィクトル・ユーゴーのレ・ミゼラブルを読んで聞かせてもらったと回想している（『季刊別府大学』1970・夏季号）
- (13) 宅孝二 明治37年（1904）－昭和58（1983） ピアニスト、作曲家 パリ音楽師範学校卒。帰国後山田耕作に作曲を学ぶ、戦後は東京芸術大学に勤務していた。わが国のクラシック音楽界の重鎮として活躍する一方、シャンソンの作曲や渡辺貞夫のジャズ教室へ通い、南博や藤井郷子といったジャズ・ピアニストを育てている。市川崑監督の「処刑の部屋」など映画音楽も50本近く作曲している。
- (14) 最相制子 詳細は不明、中島健蔵著「音楽とわたし」の中で「火の会」の九州遠征の箇所「宅孝二のピアノ二重奏の作品を一しよに演奏するお嬢さんがいた」とある
- (15) 佐藤美子 明治36年（1903）－昭和57年（1982） 昭和期のメソソプラノ歌手、音楽教育者。昭和3年東京音楽学校研究科終了。パリに渡り4年間留学、帰国後、藤原歌劇団に入団、創作オペラ協会を設立、会長となる。別府大学教授などを歴任。夫は佐藤敬。
- (16) 清香園が正しい、『別府女専新聞』の広告欄に「上田ノ湯公會堂裏」とある

引用及び参考文献

【別府女専新聞】第2号 昭和22年8月

【別府女専新聞】第3号 昭和22年11月

【別府女専新聞】第13号 昭和23年11月

【大分合同新聞】昭和22年11月12日、13日、14日

【東京新聞】昭和21年4月22日夕刊

【別府大学の三十年】三十周年記念誌編集委員会編 佐藤学園・別府大学 1978.3

【草野心平全集第8巻】草野心平著 筑摩書房 1982.1

【草野心平全集第10巻】草野心平著 筑摩書房 1982.8

【豊島興志雄論－火の会、生い立ち、童話】永淵道彦著 双文社出版 1997.3

【回想の戦後文学】中島健蔵著 平凡社 1979.12

【音楽とわたし】中島健蔵著 講談社 1974.3

【新潮世界美術辞典】新潮社 1985

【日本女性人名辞典】日本図書センター 1993

史学論叢第 42 号 (2012 年 3 月)

『日本近代文学大事典』日本近代文学館編 講談社 1984

(よしおか・よしのぶ 別府大学附属図書館)